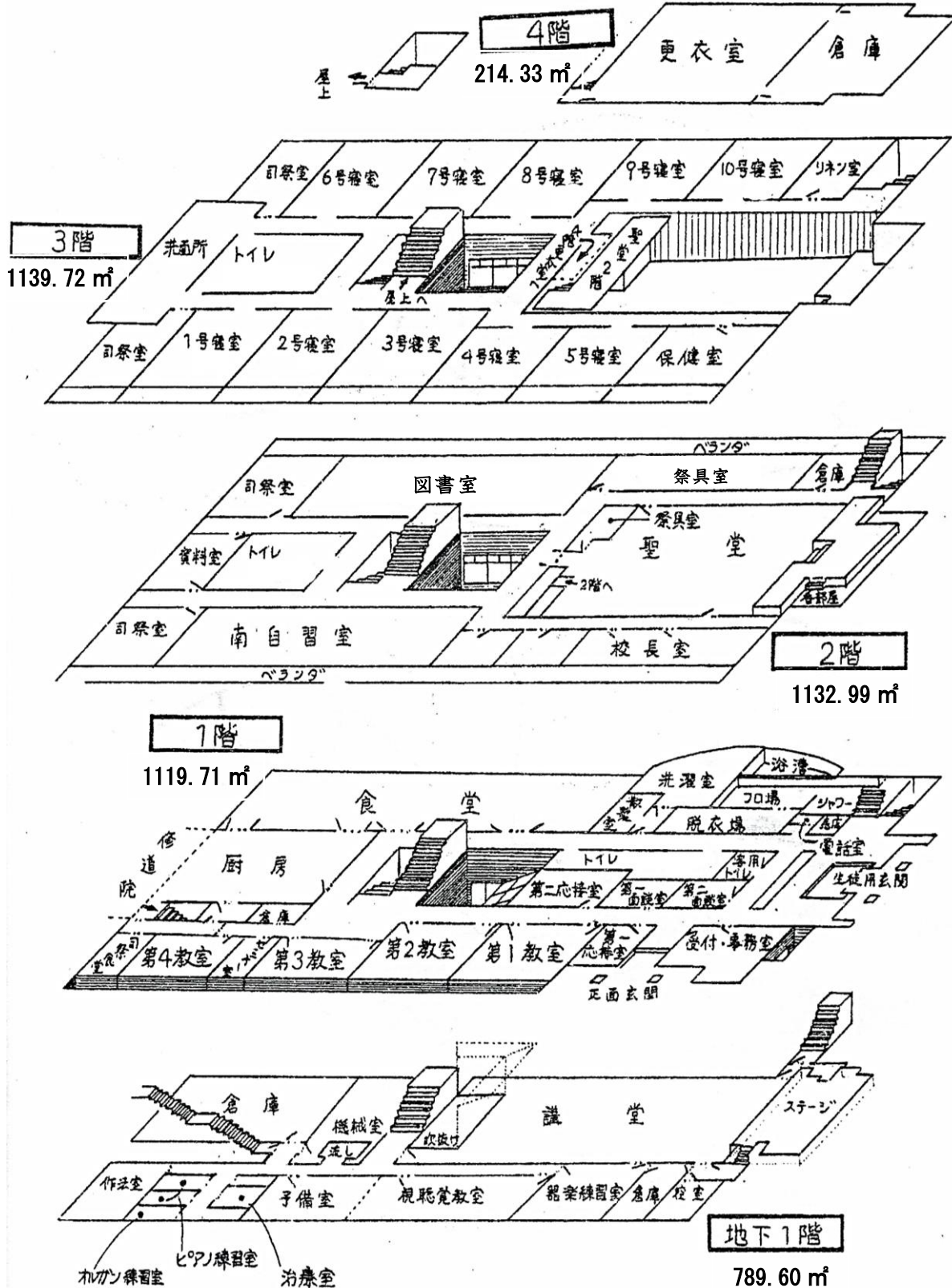


長崎カトリック神学院に関する共通認識資料

1. 長崎カトリック神学院の概要

(1) 各階図面および床面積



(2) 土地・建物に関する情報

【土地】

所在地	地目	地積 (㎡)	取得年月日
長崎市橋口町 92 番 5	宅地	2,726.47	1987(S62)年 11 月 19 日

【建物】

所在地	種類	構造	取得年月日
長崎市橋口町 92 番地 5	校舎・ 寄宿舍	鉄骨鉄筋コンクリート造 陸屋根銅板葺 地下 1 階付 4 階縦	1989(H1)年 10 月 31 日

2. 沿革

(1) 小神学校小史

1865(慶応元)年 12 月	プティジャン神父により大浦の司祭館の屋根裏部屋に神学校が創立。
1875(M8)年 10 月	ド・ロ神父の設計による神学校舎（旧羅典神学校）が完成。
1882(M15)年 12 月 31 日	第 1 回卒業生として邦人司祭 3 人が誕生。
1925(T14)年 12 月	長崎市本原に鉄筋コンクリート三階建ての浦上神学校が新築。
1930(S5)年 3 月	浦上神学校閉鎖。大浦神学校へ戻る。
1932(S7)年 9 月	大浦東山手の旧東山学院に移転。
1940(S15)年	再び大浦へ。
1943(S18)年 4 月	南山手 1 6 番地に移る。
1944(S19)年 4 月	長崎中神学校開設。
1947(S22)年	神学・哲学科生、大村市葛城へ。
1948(S23)年 4 月	大村市葛城の大神学生は、福岡サン・スルピス大神学院へ編入。
1952(S27)年 10 月 14 日	長崎市橋口町 1-1（現・大司教館）に、長崎公教神学校校舎を建設
1989(H1)年 11 月 6 日	現在の長崎カトリック神学院の落成祝別式

(2) 小神学生数の推移

年度	1989	1994	1999	2004	2009	2014	2019	2021
人数	82	60	53	35	20	17	14	11

3. 現状と課題

(1) 小神学生数と建物の規模

100 人の神学生を収容できる校舎として建てられたが、現在は小神学生の数も 10 名となり、使わない部屋も多い。小人数では掃除も行き届かず、管理が難しい。

小神学生だけを育てる場だけでなく、教区全体の子どもたちを育てる場として考えることも意義あることではないか、との意見もある。

(2) 地下1階

地下は湿気が多くて、常時除湿器を回しているが、毎日水を捨てなければならない現状にある。

(3) 建物の修繕

築32年を迎え、あちこちに不具合が生じてきており、毎年何かしらの修繕を必要とする。

(4) 太陽光パネル

小神学校の屋上には、2013(H25)年11月に太陽光発電パネルが設置された。総工費は17,115,000円である。売電額は年間約190万円前後となっている。

4. 将来の可能性

召命の問題は、長崎教区にとって根幹の問題である。教会の事情だけでなく社会の事情も鑑みながら、教区長や司祭、修道者、信徒が一致団結して、今こそ本気度を見せて召命に取り組んでいくことが必要である。

(1) 現状のまま

【メリット】

- ・ 現状維持ができる。

【デメリット】

- ・ 上記3で挙げた課題がクリアされない。

(2) 小神学校の機能を保ちつつ、一部を別目的（引退司祭施設等）に利用

【メリット】

- ・ 神学生のためだけだと建物が広すぎるので、余剰面積を有効活用できる。
- ・ 引退司祭は若い神学生と一緒にだと気持ち的に楽しいかもしれないという希望があり、神学生にとっても人生を学ぶことも大いにある。

【デメリット】

- ・ 小神学校自体の存在意義を考えると、不利益も大きいのではないか。
- ・ 神学生と引退司祭という全く生活リズムが異なる中で、調和を保てるのか。
- ・ 同じ建物を使う以上、不具合が生じた時などの対応で院長の負担が大きくなる。

(3) 小神学校の機能を保ちつつ、一部を別目的（教区本部事務局や会議室）に利用

【メリット】

- ・ 建物の余剰面積を有効活用でき、移転のための改修費用等が節減される。
- ・ これまで2つの建物を維持管理してきた分が1つになり、維持管理費用の低減が見込める。

【デメリット】

- ・ 教区本部事務局や法人会計事務室には様々な人が出入りする。小神学校は教育施設であるため、静穏な環境の確保や神学生の安全確保が保てない。小神学校のあり方の根幹が問われる。

- (4) 小神学校をカトリックセンター別館（旧修道院）跡地に新築し、現在の建物は教区本部事務局や会議室、司祭居住施設などに利用

【設計図案】

階数	床面積	用 途
1階	288.0㎡ (87.12坪)	玄関、受付・事務室、応接室、トイレ、教室（10人×2部屋）、食堂（24人規模）、司祭食堂、厨房、シスター休憩室
2階	288.0㎡ (87.12坪)	聖堂（4人×6列席）、香部屋、自習室（20机規模）、図書室（6千冊規模）、院長室（執務室、寝室、洗面所）、トイレ、大倉庫、倉庫
3階	288.0㎡ (87.12坪)	寝室（7人規模×3室）、トイレ、洗面所、学生浴室、洗濯室、物干場、副院長室（執務室、寝室、洗面所）、倉庫

【メリット】

- 新しい小神学校は人数に応じた、独立した建物となる。
- 新築となると、ITなど教育環境の充実も見込める。
- 現在の小神学校の建物は、例えば2階の大きなスペースを教区本部事務局と法人会計事務室として活用できるし、3階は一部を会議室、一部を司祭宿泊室などに活用できる。

【デメリット】

- 上記の設計案（20人収容規模）の建設費用は、概算で約2.5億～3億円である。
- シスターの住まいが確保できないので、シスターは大司教館からの通いとなる。
- 小神学校は築32年経っており、教区本部事務局を移転したとしても20～30年後には新しく考える必要がある。（ただし、現在の大司教館も同時期に建てられた建物であり、その時にはこの2つの建物を統廃合する議論が必要となる。）

- (5) カトリックセンター跡地に新しい建物を新築し、その中に小神学校も含める。

【メリット】

- 全く独立した利用区分となり、静穏な環境と安全性が保てるような設計が可能であるならば、適正規模の小神学校が整備できる。
- ITなど教育環境の充実が見込める。
- 普段は静穏な環境にありながらも、時々司祭たち（現役司祭も引退司祭も）や信徒たちとも交わることが可能となる環境が作れるかもしれない。

【デメリット】

- 他の施設との共存が可能であるのか。
- カトリックセンター跡地に、小神学校を含めた様々な機能を備えた建物を新築するとなると、多額の費用を要するため、どのように財源を確保するかが大きな問題となる。